令和５年度

「まちのひろば創出職員プロジェクト」

報告書

川崎市市民文化局コミュニティ推進部
協働・連携推進課

令和５年度 「まちのひろば」創出職員プロジェクト 報告書

●目次

1 概要
2 これまでの取組 （令和元年度～4 年度）
3 今年度の取組 （令和５年度）

●職員プロジェクトメンバー 15 名

（グループＡ）

1 字廻 清美 麻生区役所まちづくり推進部生涯学習支援課（一般事務）
2 佐々木 陽花 中原区役所地域みまもり支援センター地域支援課（保健師）
3 佐藤 武典 議会局議事調査部議事課（一般事務）
4 高木 淑衣 環境局施設部処理計画課（一般事務）
5 野村 武史 川崎区役所まちづくり推進部企画課（一般事務）

（グループ B）

6 氏原 永理香 幸区役所まちづくり推進部総務課（一般事務）]
7 小名木 七海 宮前区役所区民サービス部区民課（一般事務）
8 川村 大空 まちづくり局総務部庶務課（一般事務）
9 菅田 彩 中原区役所地域みまもり支援センター地域支援課（保健師）
10 渡部 実樹哉 中原区役所まちづくり推進部地域振興課（一般事務）

（グループＣ）

11 飯田 珠実 建設緑政局緑政部みどり・多摩川協働推進課（造園職）
12 大高 丈宗 麻生区役所危機管理担当（一般事務）
13 田邉 美樹 多摩区役所まちづくり推進部地域振興課（一般事務）
14 寺田 早織 宮前区役所まちづくり推進部企画課（一般事務）
15 村山 達哉 市民文化局市民生活部戸籍住民サービス課（一般事務）

●事務局・オブザーバー（市民文化局コミュニティ推進部）

16 古泉 智子 協働・連携推進課（一般事務）
17 石見 隼人 区政推進課（一般事務）
18 藤本 絢 協働・連携推進課（一般事務）…グループＡ オブザーバー
19 渡辺 泰斗 区政推進課（一般事務） …グループＢ オブザーバー
20 小林 芳 協働・連携推進課（一般事務）…グループＣ オブザーバー

1　概要

本市は、暮らしを取り巻く社会環境の変化を見据え、市民一人ひとりが多様なつながりをつくり、自分らしく幸せに暮らせる地域社会の実現を目指して、平成 31（2019）年３月に「これからのコミュニティ施策の基本的考え方」（以下「基本的考え方」という。）を策定しました。「基本的考え方」の中では、地域レベルの取組として、多様なつながりを育み、誰もが気軽に集える出会いの場として、多様な地域資源を活用した地域の居場所を「まちのひろば」と名付けて、市内に創出していくこととしています。

この取組を推進していくためには、行政としても、公共施設の地域化、民間資源の活用推進及び「まちのひろば」の自主性や自律性を尊重した支援などを進めるとともに、「市民創発」がもたらす様々な変化や動きに呼応することが求められていることから、職員の意識改革と人材育成が必要です。

こうしたことから、職員参加と意識改革の推進及び「まちのひろば」の見える化を目的に、職員自らが地域に出て「まちのひろば」のモデルを実践していく、これまでにない庁内横断型のプロジェクトチームを令和元年度に新たに設置し、地域の方など多様な主体と連携しながら多くのモデル実践を行い、新たな「まちのひろば」を生み出してきました。

地域に広がる「まちのひろば」
～希望のシナリオのイメージ～

2　これまでの取組

（１）令和元年度

取組初年度ということもあり、若手職員を中心に多くの応募があり、オブザーバー２名を含め 22 名で４つのグループに分かれて活動し、以下の実践を行いました。

- 古い木造住宅が多い密集市街地の火災の延焼防止や災害時の一時避難場所とし設けられる「防災空地」を活用したマルシェの実施。
- 市内大企業の配水所未利用地の有効活用を目的とした「FUSO グリーンガーデンを活用したまちのひろばの創出について」の取組。（※悪天候によりイベント実施に至らず）
- 飲食店と連携したスナックや、JR 川崎駅コモレビテラスでのワークショップの開催等、地域の声を具現化した「まちのこえをカタチにするプロジェクト」の実施。
- NEC の公開空地を活用したイベント実施や NEC 玉川事業場との共創による、さまざまなイベントの実施。

飲食店と連携したスナック
「日進町コミュニティスナック」

地元町内会と協働した
小田防災空地でのマルシェ
「小田ランタン横丁」

（２）令和２年度

新型コロナの感染拡大により、これまでと同様の手法で顔を合わせて集うことが難しくなったことから、令和２年度については、新しい取組を行うのではなく、前年度の取組を深化させながら、「新しい生活様式」に対応した新たな居場所やつながりづくりを実践していくこととし、テーマを「まちのひろば with 新しい生活様式」の創出としました。

令和元年度から継続実施する２つの取組（小田の防災空地、NEC の公開空地を活用したイベント）を中心に、新しい生活様式に対応した「まちのひろば」づくりを実践することとし、昨年度からの継続メンバーを含めた 15 名が３グループに分かれて活動しました。

- 防災空地を活用し、街中に非日常の楽しさを生み出す地域交流のマルシェを地域の方と企画し実現。
- NEC 公開空地にて敷地所有者、地域関係者と連携して実証実験を行い（中原区のご当地体操、ほしぞらディスコなど）、活用の可能性や課題、望ましい運営体制を模索。
- 幸区の鹿島田駅前交通広場ほかで、新川崎タウンカフェなど地域のキーパーソンとともに、コミュニティガーデン創出の取組を実施。

また、令和２年度からの新たな取組として、働き方改革や職員の人材育成の観点から勤務時間外に自主的な活動として参加できるサポートメンバーを募集し、集まった８名のサポートメンバーも可能な範囲で取組に参加してもらうことになりました。

NEC の公開空地を活用した
「ほしぞらディスコ」

鹿島田駅前交通広場を活用したイベントへステップアップ

（３）令和３年度

３年度の参加者は３名と少人数でしたが、その分各自の思いをより深く盛り込みながら、「公共施設の地域化から生まれるまちのひろば」などをテーマに以下の取組を行いました。

- こども文化センターと老人福祉センターの複合施設「ふれあいプラザかわさき」ロビーで、こども文化センターの貸会議室登録団体と連携して、駄菓子屋や昔遊び、エクササイズ等の多世代交流イベントを実施。
- コロナ禍で交流が進まないときだからこそと、つながりを創出するためのおためしオンライン交流会を実施。
- 多摩川スカイブリッジ開通に合わせたフォトコンテストを開催。同ブリッジ開通式には、フォトコンテストに連動した特別な場所からの写真撮影が可能なフォト交流会を実施。

お手玉で子どもと高齢者の多世代交流

（４）令和４年度

４年目の取組となった同プロジェクトについては、３年度まで別に行っていた「地域コーディネーター研修」のステップアップ編と位置付けて実施しました。合同で行うことで、初級編として研修で座学を学び、ステップアップ編のプロジェクトで実践してより深い学びとする、という流れができました。また、プロポーザルによる業務委託で石塚計画デザイン事務所により、地域コーディネーター研修の講義から引き続きプロジェクトの各グループへのアドバイスや企画作り等のポイントのレクチャーを受けながら進められたことで、安定したプロジェクトの進行を行うことができました。

令和４年度は、14 名の参加者に、事務局のコミュニティ推進部から４名の職員がオブザーバーとして加わり３つのグループで事業を実施しました。また、自主的な活動として参加するサポートメンバーを庁内から広く募集し、オフサイトミーティングでの交流や実践の手伝いなどの協力体制をとりました。サポートメンバーには、過去のプロジェクトに参加していた職員も数名加わっていたことから、アドバイザー的な立場でも関わってもらうことができました。

新型コロナウイルス感染症の影響が続いていることから、コロナ禍における新しい生活様式の意識を持ちつつも、自由な発想で、地域の方々のご協力を得ながら、以下のとおり「まちのひろば」創出のモデル実施を行いました。

・「ミライの青空紙芝居」（グループ A）

登戸土地区画整理中によるこどもの遊び場不足の解消やママ同士の交流の場を創出するために、区域内の未利用地「ミライノバ」を活用し、市民活動団体と連携した紙芝居やコーヒーショップ出店などを実施。

「多摩区絵本の会」さんの読み聞かせ

・「テーブルゲーム　みんな集合！」（グループ B）

転入世帯が多い鹿島田エリアで小学生とその保護者を対象に、同エリアの民間施設にて参加者同士が大笑いしながら交流ができるテーブルゲームを実施。

テーブルゲームで初対面同士も楽しく

・生田地区防災訓練との連携イベント（グループ C）

町内会主催の防災訓練で、関連グッズの配布や絵本の読み聞かせ等、イベントの充実化を図ることで、町内会未加入者など新たな参加を生み、町内会未加入・加入者の交流を促進。

町内会の防災訓練へのジョイント

３　今年度の取組

（１）概要

５年目の取組となった同プロジェクトについては、４年度に地域包括ケア推進室で実施した「地域マネジメント研修」（主に地域ケア推進課や地域支援課の職員など、区で地ケアの観点から地域づくりに関わる職員が参加）の要素を取り入れ、地域包括ケア推進室（健康福祉局）、人材育成課（総務企画局）と共催で実施することで、「これからのコミュニティ施策の基本的考え方」に加え、「地域包括ケアシステム推進ビジョン」「区役所改革の基本方針」「川崎市人材育成基本計画」への政策的位置づけを行いました。

今年度は、11 の局区から、若手を中心に計 15 名の職員が参加、３グループに分かれてプロジェクトを実施しました。それぞれのグループには、アドバイザーとして令和４年度に引き続きプロポーザルによる業務委託で石塚計画デザイン事務所が、オブザーバーとして事務局のコミュニティ推進部から職員がオブザーバーとして加わり、自由な発想で「まちのひろば」創出のモデル事業実施を目指しました。

（２）全体の流れ

プロジェクト全体の流れは以下のとおりです。全体で集まる集合研修を 3 回行い、その間のフィールドワークでは、グループごとに、現地視察や地域の方へのヒアリングや打合せ等を行いました。また、オフサイトミーティングとして、過去のプロジェクトに参加した職員へ呼びかけて、企画案に対してアドバイスをもらう機会を設けました。そのほか、グループごとに、オンラインも活用しながらミーティング等を随時行いました。

５月　参加者募集
６月　地域コーディネーター研修（初級編）
《まちのひろば創出職員プロジェクト》
７月　集合研修１回目　顔合わせ・アイデア出し
～８月　フィールドワーク①前半
８月　オフサイトミーティング
～10 月　フィールドワーク①後半
10 月　集合研修２回目　中間報告
～２月　フィールドワーク②　イベント実施
２月　集合研修３回目　成果発表

集合研修は、地域資源を知るというねらいで、民間のスペースも含め、市民活動・交流の場となっている特色ある会場でそれぞれ実施しました。

（３）第１回集合研修

日時：令和５年７月 20 日（木）13 時 30 分～17 時
場所：白いハコ （向ヶ丘遊園駅からすぐ）
内容：オリエンテーション（研修の目的/目標の確認、スケジュールの共有）
おさらい（地域コーディネーター・市民協働の意義等）
講義（企画づくりのポイント）
グループミーティング（活動場所、企画テーマのアイデア出し、行動予定など）

はじめにオリエンテーション、自己紹介をしたあと、企画づくりのポイントなどの講義をはさみ、グループに分かれてアイデア出しのワーキングを行いました。最後に、各グループから話し合った内容についての発表を行い、それぞれのグループからは、以下のようなキーワードが出ました。

・グループＡ・・・自然体験、環境教育、たき火、親子
・グループＢ・・・子ども×高齢者、マッチング、居場所づくり
・グループＣ・・・若年層や親子、趣味でつながる、日ごろ通るけど立ち止まらない場所

ここから各グループで、地域の方や庁内の関係部署へのヒアリングを行いながら、どこでどんな人たちを対象にどんな「まちのひろば」をつくっていくのか、企画を詰めていきます。

（４）オフサイトミーティング

日時：令和５年８月 24 日（木）18 時半～20 時半
場所：中原区役所会議室
内容：各グループの企画案の発表と今後へ向けた打合せ

第１回から約１か月の間、各グループで調査、話し合いを深め練り上げた企画案に対し、石塚計画デザイン事務所と、ボランティアでの参加を呼びかけた過去のプロジェクト参加職員からアドバイスや感想をいただきました。

（５）第２回集合研修

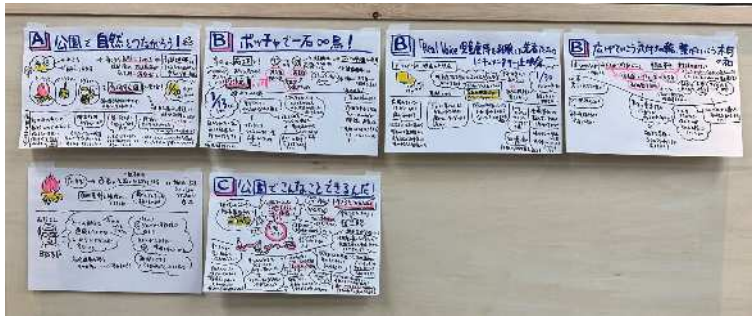
日時：令和５年 10 月 24 日（火）13 時半～17 時
場所：パサールベース（武蔵新城駅から徒歩３分）
内容：各グループからの企画発表、ブラッシュアップ、グループミーティング
講義（広報、チラシの作り方、実践当日の記録や振り返りについて）

オフサイトミーティングから約２か月、地域の方との打合せや庁内の調整などを進めながら、さらに具体的になってきた企画について各グループから発表を行い、アドバイザーの石塚計画デザイン事務所からアドバイスや感想をいただき、ブラッシュアップを行いました。各グループの企画タイトルは、以下のとおり（グループＢは３企画を提案）。

・グループＡ・・・公園で”自然“とつながろう （公園での自然体験ワークショップ）
・グループＢ・・・ボッチャで一石∞鳥！（ボッチャをとおした交流会）
“Real Voice” 児童虐待を経験した若者たちのドキュメンタリー上映会
広げていこう気付きの輪 繋げていこう木月の和
（木月地区の各団体の相互交流のしかけ）
・グループＣ・・・公園でこんなことができるんだ！
（公園での新たなつながりの創出）

参加職員の上司の方々からも参加をいただき、様子を見守っていただいたほか、「パサールベース」を主宰する石井さんも飛び入り参加、企画に対しての感想とともに、地域への思いも聞かせていただくことができました。

ここからいよいよ実践に向けて具体的に準備を進めていきます。



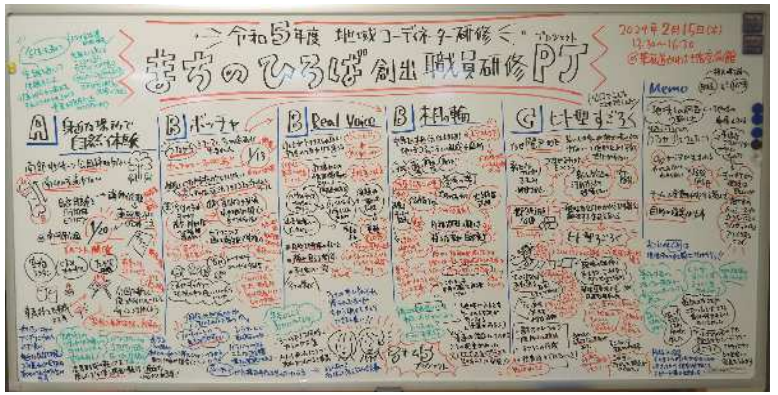
（６）第３回集合研修

日時：令和６年２月 15 日（木）13 時 30 分～17 時
場所：東海道かわさき宿交流館
内容：各グループの成果発表と講評、職員プロジェクトの振り返りと共有

前半は、７月の第１回集合研修から約半年かけて、各グループで企画、実践を行ってきた成果を発表しました。当日は庁内に広く参加を呼びかけ、参加職員の職場の上司の方々などを中心に、20 名程が聞きに来てくださいました。

どのグループの実践も、非常によく工夫されて考えられており、実践の当日もたくさんの方が参加してくださったとのこと、それぞれの発表からは、プロジェクト参加者のやりきった、という充実感が感じられました。

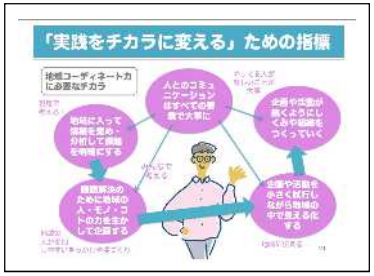
各グループの発表に対しては、アドバイザーの石塚計画デザイン事務所より講評をいただいたほか、参加職員の職場の上司の方などから感想をいただきました。また、人材育成課の課長からは、実践を通じて体験すること、仕事とは違う新たなチャレンジができるのは、貴重な機会だったのではないか、「やりたいこと」と「やれること」を調整しながら進めていった経験が今後に活きてくるのではないか、とのコメントをいただきました。



研修の後半は、今回の取組を「楽しかった」「大変だった」で終わらせず、自分自身の力として持ち帰ろうということで、参加者で職員プロジェクトの振り返りを行い、自分自身の気づきや変化、今回のプロジェクトで身についたと思うことなどを、一人ひとり発表しました。

参加者の皆さんからは、「こちらがいいと思っていることが相手にとってもいいこととは限らない」「地域の方との合意形成に苦労した」「相手の話をよく聞くことが大切」「（関係部署など）いろんな人に相談したら困りごとが解決した」など、対話やコミュニケーションの大切さに気づいたという声が多く上げられました。また、企画していく中で大切なこととしては、「理由付けや根拠を考えていくこと」「情報収集や事前準備」「色々な視点から見ること」などがあげられていました。

石塚計画デザイン事務所からは、今回のプロジェクトをとおして、「まちのひろば」創出のための支援や環境づくりを行う市役所の職員としての立場と、「まちのひろば」を実践していく地域（市民）の立場の 2 つの立場を行き来することで、気が付いたことがたくさんあったのではないかとのお話をいただきました。また、普段から地域に入り込むこと、地域から学ぶ姿勢をもつことが大事だとのメッセージをいただきました。



次の章では、各グループからの取組レポートを紹介します。

4　各グループの取組内容

（１）身近な場所で自然体験～公園で自然とつながろう～（Ａグループ）

●プロジェクトメンバー

野村 武史　（川崎区役所まちづくり推進部企画課）
佐藤 武典　（議会局議事調査部議事課）
高木 淑衣　（環境局施設部処理計画課）
字廻 清美　（麻生区役所まちづくり推進部生涯学習支援課）
佐々木 陽花（中原区役所地域みまもり支援センター地域支援課）

ア　企画検討の経緯

第１回集合研修、８月下旬頃に開催されたオフサイトミーティングの中で、焚き火等の自然体験を行いたい意見が多数挙げられたため、気軽に自然体験を行うことができ、様々な人たちが集える場を創出することをテーマとして掲げました。

企画のターゲットとして、川崎市内で特に自然が少ない南部地域に住む親子を対象としました。具体的な理由として、川崎市がホームページで公表している「各区別の市民一人当たりの公園面積」によると、面積が少ないのは幸区及び川崎区と市内南部地域に集中しており、市内で同面積が最も少ない幸区は、最も多い麻生区の４分の１以下であることが判明したためです。こうした現状を踏まえ、市民一人当たりの公園面積が最も少ない幸区を開催場所に決定しました。

レクリエーションとして自然と触れ合うだけではなく、身近な自然について理解を深めるきっかけ作りとするための自然体験型ワークショップとして、川崎市内で採取できる木の実や木材等を使用した工作を実施することとしました。あわせて、多摩川等の川崎市内の自然に関するレクチャーを講師に行ってもらい、市内の自然に関する新たな魅力発見の一助となるような取組も実施することにしました。

イ 実践 （令和６年１月 20 日（土）13 時～17 時 @南河原公園（幸区））

① エコクラフト・市内の自然レクチャー

エコクラフトを始めとした空き缶ランタン、くるみキャンドルの作成等の工作や川崎市内の自然のレクチャーについて、大師河原干潟館を運営している NPO 法人多摩川干潟ネットワークの佐川理事長ほか３名のスタッフの方に、御協力いただきました。

当日は雨天のため、自然のレクチャー等の一部プログラムを実施できませんでしたが、親子で協力し合いながら熱心に工作を楽しんでいました。くるみの殻を用いてキャンドルを作ることの目新しさに興味を示す御家族や、能登半島地震を受けて身の回りのもので手軽に作ることができる空き缶ランタンの重要性を感じていた親子など、工作を通じて有事に活かせるスキルを学ぶ機会を創出できたと感じられました。

工作の様子

大師河原干潟館の説明

実施できなかったエコクラフトについては、必要な材料等を持ち帰ってもらい、御自宅で楽しんでもらうこととしました。同じく未実施の市内の自然のレクチャーの代わりに、大師河原干潟館のパンフレットと併せて市内の多摩川沿いの地図が記されている「多摩川であそぼう！ かわさき今昔あそびマップ」を配布しました。これらの取組を通じて、施設や多摩川等の自然スポットに足を運ぶきっかけになればよいと思います。

② 焚き火体験

薪割りから火起こしまで行うことができる焚き火体験について、NPO 法人国際自然大学校が運営する麻生区の黒川青少年野外活動センターの野口所長ほか１名のスタッフの方に、御協力いただきました。

当日は消火器を複数常備した上で ４ つのグループに分かれて体験を実施し、講師の人以外にもまちのひろばスタッフが巡回し、安全管理を徹底して焚き火体験を行いました。メタルマッチを用いた火起こしのやり方から講師の方にレクチャーしてもらい、薪割り・削りくずを作るなどの工程を通して、雨天の中でも全てのグループで実際に火を起こして焚き火を行うことができました。

各工程を進める中で、親子同士が協力するところや同じグループ内で別の家族同士で交流するところ、中には子ども同士でどうやったらうまくできるか教え合う姿が見

講師のレクチャーの様子

火起こしの様子

受けられ、様々な人が集い、交流できる場である「まちのひろば」を創出できたと感じられました。

エ 振り返り・今後の展望について

本イベント企画実施の反省点として、南河原公園の周辺住民や地元の町内会に説明に入った際、早めに地元に説明をしてほしかったという声や、火を扱う本イベントに対して安全面を懸念する声が挙げられました。グループとしては安全に実施するために道路公園センターと調整を重ねていましたが、実際に地域住民の視点から率直な不安を伝えられたことで、町内会役員以外の住民の方にも安心してもらうための説明が不足していたと気付きました。こうした地元の声を受けて、予定していた周辺の町内会掲示板へのポスター掲示に加え周辺住宅へのチラシのポスティング等、火を扱うイベントを実施することと安全管理を徹底する旨を周知しました。その結果、無事に事故や苦情もなく終えることができましたが、それは町内会の皆様に事前に懸念点を提示いただいたおかげで、その時できる最大の対応をすることができたからだと思っています。

一方で、目的を達成できたポイントとしては、メインテーマである市内南部地域の親子を対象に自然体験を行ったこと。また、本イベントを通じて北部で活動する黒川青少年野外活動センターと、南部で活動している大師河原干潟館が交流する機会の創出も目的としていました。この点については、関係者を交えた本イベントの振り返りの際に、「交流して各地域の知らない自然を学ぶことが重要である。ぜひそちらの施設に一度伺いたい。」といった感想を講師からいただけることができ、今後、南北の団体が区を超えてつなげるきっかけの一助になることができたのではと感じています。

当日のイベントに参加した方々のアンケートでは、「いつもの公園で非日常体験が出来て貴重な体験となりました。」といった感想があり、公園というと火の扱いやボール遊び等、制限があるという意識を伺い知れました。本来公園内で焚火をする行為は制限がありますが、今回は市主催イベントということで特別に許可を得て開催することができました。また、講師を依頼した黒川青少年野外活動センターと大師河原干潟館についても、ほとんどの参加者が両施設を知らなかったという結果でした。参加者の方々にはこの身近な公園での焚火体験を通じて、自然体験の楽しさを発見するとともに、今回講師としてご協力いただいた黒川青少年野外活動センターや大師河原干潟館に足を運ぶ動機のひとつになることができればと思っています。

末筆ではございますが、今回のイベントは準備段階から多くの方のサポートをいただき開催することができました。講師の黒川青少年野外活動センターと大師河原干潟館の皆様には、企画の段階からより良いイベントの実現のために多くの助言をいただきました。また、幸区役所道路公園センターの皆様には南河原公園の使用、火の使用についてご相談させていただくとともに、同じ志をもつ市立幸高校の学生の皆様をご紹介いただいたおかげでより大きくつながりの輪を広げることができたと思っております。町内会の皆様へのご説明にあたっては、

幸区役所地域振興課の皆様にもお力添えいただきました。広報と当日備品については南河原小学校と南河原こども文化センターの皆様にお力をお借りし、おかげさまで多くの参加者を迎えることができました。改めまして、ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

（２）REAL VOICE上映会～コミュニティにできることを考えよう～（Ｂグループ）

●プロジェクトメンバー

川村　大空　（まちづくり局総務部庶務課）

小名木　七海（宮前区役区民サービス部区民課）

ア キックオフ

7月20日に行われた集合研修の１回目では「テーマをどうするか」についてグループミーティングを行いました。その結果「つながり」をテーマに、グループ内で３つの企画を行うことにしました。その中の一つである、この上映会は、SNSなど様々な形でつながりが生まれているなかで、今回の映画をきっかけに文化や育ちの背景に関わらず、誰も取り残されない、誰もが安心して生活できる社会の実現に向けた「つながり」について考える機会を創出するというものです。そのため、ただ映画を上映するのではなく、社会的養護の第一線で働く職員を呼んでパネルディスカッションも行うことにしました。

イ 準備（８月～11月）

今回の企画を行うにあたってまず、私たちは、社会福祉協議会から紹介してもらった映画を題材にパネルディスカッションをする案についてこども未来局虐待室へ相談し、賛同いただき、中部児童相談所を紹介してもらい、その後、中部児童相談所にファシリテーターをお願いした白梅学園大学名誉教授である長谷川教授を紹介してもらいました。そして、８月から11月にかけてパネリストとして出演してもらうようスカウトを行い、同時にＴＯＨＯシネマズ川崎に貸館を依頼しました。また、本編を上映する前に今回の映画の監督である、山本昌子監督へのスペシャルメッセージの撮影も行いました。

どの方にもなぜ私たちがこれをしたいのか、目的とやってほしい役割について明確に伝えるよう意識しました。今回の企画は全て私たちだけで考えたのではなく、色んな方と話していくなかで出来上がったものです。

11月中旬から、関係各局に調整を図り、ご協力いただくようお願いし、市長にも来ていただくため準備を重ねました。

（当日は無事に市長にもご参加いただくことができました。）

（会場の下見の様子。ＴＯＨＯシネマズ川崎さんは、試写会などの経験が豊富で、照明の明るさや客席と出演者の距離感など、丁寧に教えていただきました。）

（監督はとても気さくで素敵な方でした。）

ウ　準備（12月）

12月からは広報を開始し、民生委員さんや青少年指導員さんにも社会福祉協議会とこども未来局のお力を借りて広報しました。

また、一般の方にも知ってもらえるよう教育委員会を通してPTAや市民活動センター、子ども食堂などにもチラシを置いていただきました。

庁内には児相の管理職会議、保護課の管理職会議などに出席したり、地域ケア推進課の課長会議でもチラシを配布して、関係団体等への広報にご協力いただきました。

エ イベントの実施（2024年1月30日　13時半～16時半）

イベント当日はアンケート用紙を配布し、感想を記入してもらいました。そのアンケートでは、まずは知ることから始めようと思った、自分にできることはなにか、家族に今回の話を共有した、といった声や、何気ない挨拶の大切さを感じた一方、関わりの難しさを感じたといった声も聞かれました。他にも、知らなかったため驚いたといった、勉強になった、支援者の方の「評価者ではなく、理解者でなければならない」といったセリフが印象的だったといった感想も聞かれました。

関係者含めて、参加者総勢約120名の方に、今回の問題と、ネガティブに捉えられがちな支援者の真剣な姿勢を伝えることができたのではないか、と思います。

また、市長からは「つながりは人によってとらえ方が違うため、それぞれが求めているつながりを意識して施策を展開していきたい」というような発言がなされ、我々が狙っていた「つながりについて考える機会」になりました。高津区長からも、後日別の虐待に関する映画を見た、区長級の地ケアの会議で、市民が捉えるつながりについて議論されたとも聞きました。

オ 振り返り

今回の企画を通し、学んだことが３つあります。

１つ目は「目的を明確にする」こと。今回、私たちはこの上映会を通じてこの問題を自分事ととらえてほしい、多くの人にまずは知ってほしいという目的で企画しました。多くの方にご協力をいただくなか、目的を明確・具体的にすることで、相手への説明もしやすく、また、説得力を持たせることにもつながりました。そして、私たち自身も着地点を見失わずに進むことができました。

２つ目は「顔の見える関係」作りです。リモートで一度打合せをしたことがあったのですが、お互いの雰囲気だったり話すタイミングをうまくつかめず、中身のある打合せにはあまりなりませんでした。様々なツールが発達していますが、今回の企画にもあったように「つながり」はやはり直接話すことで生まれ、会ったほうが確実かつお互いの顔が見える関係を築きやすい、ということを実感しました。そして、実際にお会いして話すことで、お互いの表情や所作、雑談等から、予備情報も含めた様々なことを認識でき、考え方の共有につながったものと感じました。

３つめは利害が一致していることです。今回、貸館を快諾していただいた東宝シネマ川崎の野間総支配人も少しお話されていたことですが、お互いの利害が一致していることも大事だと感じました。今回、映画館でおこなったのも、映画館で映画を見ることが好きな人や、映画自体が好きな人など様々な人に来てほしいという目的からでした。パネリストとして立っていただいた方も、「支援者」という立場である以上、必ずしもポジティブな印象をみんながもっているわけではないだろう、という不安を抱えていました。しかし、今回のパネルディスカッションを通じて支援者のリアルボイスを知ってもらうという利益があることも伝え、不安を払拭することができたのではないかと思います。

今回のプロジェクトに携わった全ての方達との協働で完成しましたことに、末筆ながら感謝を申し上げます。

（３）ボッチャを通じた世代交流を楽しもう！@かないばら苑♪（Bグループ）

●プロジェクトメンバー

氏原　永理香　（幸区役所まちづくり推進部総務課）
川村　大空　　（まちづくり局総務部庶務課）
小名木　七海　（宮前区役所区民サービス部区民課）
渡部　実樹哉　（中原区役所まちづくり推進部地域振興課）
菅田　彩　　（中原区役所地域みまもり支援センター地域支援課）

ア キックオフ

7 月 20 日に行われた集合研修の１回目では「テーマをどうするか」についてグループミーティングを行いました。その結果「つながり」をテーマに、グループ内で３つの企画を行うことにしました。その中の一つとして、「普段関わりのない高校生と高齢者が、誰でもできるボッチャをすることにより、多世代交流による気付きや交流のきっかけを創出する」という企画を考えました。そのため、企画段階から地域の方と話し合いを重ねて、より記憶に残る交流会となるようにしました。

イ 準備（10月～12月）（以下一部敬称略）

活動の場を、長寿日本一でボッチャ大会も行っている麻生区としました。まず、ボッチャで地域と関係を築かれてきた麻生区地域振興課西泉課長補佐・高齢障害課新橋係長へヒアリングを行い、社会福祉法人一廣会かないばら苑を紹介していただき、栗木台地域包括支援センター・片平地域包括支援センターに企画について御賛同いただきました。麻生区の高校へヒアリングをしたところ、神奈川県立麻生総合高等学校生徒会・桐光学園高等学校インターアクトクラブに御賛同いただきました。

11 月 14 日に地域関係者と打合せを行い、企画の目的や内容の詳細について意見をいただきました。そして、目的を「１回限りとならない多世代交流」とし、「ボッチャをやったことのない高校生が、ボッチャ経験のある高齢者と一緒にゲームをする」という内容で、地域包括支援センターよりボッチャ経験のある高齢者を集っていただくこととなりました。11 月 22 日に会場となるかないばら苑の視察及び打合せを行い、吉野苑長や依田様と企画の詳細について検討しました。

そこで、かないばら苑のデイサービスプログラムである「棒サッカー」を利用者の方と共に高校生に一緒に体験していただけたらより面白いのではないかと御提案をいただきました。また、企画実施にあたり、麻生区職員も当日に参加できるとより今後の継続性に繋がるのではないかと御意見をいただき、麻生区の西泉課長補佐も御参加くださることとなりました。

11 月 27 日には学校関係者と打合せを行い、「コロナ禍を経て、地域との交流が減っているため是非参加させていただきたい」「麻生区内の高校同士の交流もほとんどない」ということで、企画に前向きな御意見をいただきました。講師選定は、地域包括支援センターと麻生区新橋係長へ相談した結果、麻生区等でボランティアをされている中村憲正様（高齢者施設でボッチャをされている方）と障害者スポーツ指導員の山戸茂様（競技での審判の御経験がある方）にご依頼をしました。

講師の中村様より、高齢者施設でのボッチャと競技のボッチャには、やり方に大きく差があるため、いくつか施設でのボッチャを見学をしてみてほしいと御提案をいただき、中村様が日頃ボランティアをされている社会福祉法人徳心会 菅の里（11 月 22 日）、ヴィラージュ虹ヶ丘（12 月 12 日）へ伺いました。

座って実施（社会福祉法人徳心会 菅の里）

線を省略しルールを簡略化（ヴィラージュ虹ヶ丘）

競技におけるボッチャのルールは、「投げる際に線を踏んではいけない」「投げる順番はジャックボールとの距離によって決まる」といった細かいルールがありますが、「認知症の方にとっては、細かいルールがストレスになってしまうこともある」ということや、「投げる順番は、ホワイトボードに書いてあると分かりやすい」ということを学びました。視察を通じて得た学びをもとに、再度かないばら苑吉野苑長・依田様と打合せを行い、「高校生も高齢者も楽しめるにはどうしたら良いか」を検討しました。そこで今回は、施設を利用されている高齢者の方とは棒サッカーを行い、日頃立ってボッチャをされている高齢者の方と、①高校生と高齢者の合同チームで競技用ボッチャを体験②高校生は高齢者疑似体験セットを用いて決勝戦・３位決定戦を実施③施設で実施しているようなボッチャの体験という流れにしました。また、「握力計で力比べをするのも面白いのではないか。」との御意見もいただき、体験していただくこととなりました。

ウ イベントの実施（2024 年 1 月 13 日　13 時半～16 時半）

（高校生に御挨拶される吉野苑長）

（棒サッカー体験）

棒サッカーでは、高校生が利用者の間に入れていただき、音楽をかけながらにぎやかに盛り上がっていました。

（自己紹介）

（ルール説明・チーム名・先行決めジャンケン）

自己紹介では、高校生から「ボッチャが初めてで楽しみである」ということや、ボッチャ経験の高齢者からは投げ方のコツ等もお話いただきました。チーム麻生（顧問の先生・かないばら苑依田様・地域包括支援センター・西泉課長補佐・ボランティア中村様）として、地域合同チームにも参加いただき、場を盛り上げてくださいました。

試合形式は、３人（地域チームは６人）×４チーム、トーナメント形式２エンドとし、審判は山戸様に行っていただきました。最初の２試合は高校生は通常どおりボッチャを行い、３位決定戦と決勝戦では高齢者疑似体験セットを装着して体験していただきました。握力計で最も力があったのは高齢者の方で、比較して賑わっていました。

また、チーム内で高校生に高齢者の方がニックネームをつけてくださる等、応援しながら盛り上がりました。

（3 位決定戦の様子）

（全員で施設でのボッチャを体験）

エ 振り返り

高校生からは「ボッチャは初めてだが、チーム戦で最後まで勝敗が分からず面白いスポーツでした。」「高齢者疑似体験セットをつけたり、地域の方とお話ができて良かったです。」との感想をいただき、参加高齢者からは「孫のように楽しく交流ができました。」「若い人との交流があまりないので、今後高校生とのボッチャ交流を考えたいです。」との感想をいただきました。

また、施設・指導者・高校顧問の方からは、「地域住民（在住・在学・在勤）と地域資源と自治体職員が、このような関係性で地域課題を解決していけるような『川崎市の文化』が根付くことを願います。」「皆さん楽しくボッチャをされていて良い交流会でした。」「（後日）インターアクトの年次大会で活動報告をしました。」と今後に前向きな御意見をいただきました。

今回の企画を通じて、地域の方と共に話し合いを行い、企画を深めていくことはとても魅力的なことであると感じました。また年代を問わず、人を大切にすることの可能性は大きいと感じました。今回のプロジェクトに携わっていただいた全ての方々との協働で完成しましたことに、末筆ながら感謝を申し上げます。

（４）「広げていこう気付きの輪　繋げていこう木月の和」（Bグループ）

●プロジェクトメンバー

菅田　彩　　（中原区役所地域みまもり支援センター地域支援課　保健師）
渡部　実樹哉（中原区役所まちづくり推進部地域振興課　一般事務職）
川村　大空　（まちづくり局総務部庶務課　一般事務職）

ア キックオフ

7月20日に行われた集合研修の１回目では「テーマをどうするか」についてグループミーティングを行いました。その結果「つながり」をテーマに、グループ内で３つの企画を行うことにしました。その中の一つとして、多世代交流を軸とした関係団体同士でのマッチングの実現可能性について検討していくことにしました。

イ 準備（8月）

今回の企画を行うにあたってまず、私たちは、社会福祉協議会へそれぞれにニーズがあるのかをヒアリングを実施。そのなかで、「保育、高齢者、障害者、児童・母子のそれぞれの団体で、地域貢献、当該団体の理解促進について、コロナで活動が制限された状況であったことから、アフターコロナの今日では、徐々に再開していきたいという意思があるように感じる。ただ、高齢者施設では、現在もクラスター等が発生していることから、施設の考え方にもよるが、コロナ感染対策に一定の配慮が必要な可能性はある。」との意見をいただき、その可能性を基に地域団体を紹介してもらい、順次、個別にヒアリングを実施。

各団体からは、「地域を良くしていきたいと考えているので、やれることはやっていきたい。」、「本団体では、こども文化センターで子ども等とのふれあいを軸に活動してきたため、是非参加させていただきたい。」、「自施設の駐車場などで数時間程度触れ合う等考えられると思う」など前向きな発言をいただき、企画の趣旨に賛同いただき、つながりのネットワークを作ることの意思確認ができました。

ウ 「木月のわ」結成（9月26日）

全団体が集まった全体会を実施し、まずは大きなイベントを実施することは考えず、２団体程度でこれまでの交流経験を活かして、スモールスタートでできることからやっていく方針で確認しました。

また、ネットワークの名称を「広げていこう気付きの輪　繋げていこう木月の和（【略称】木月のわ）」と決定し、今後、連絡を取り合い活動していくことを確認しました。

出席：介護老人福祉施設すみよし　和田施設長
社会福祉法人しいの実　近松施設長
木月保育園　　棚原園長・近野主任
木月ほほえみ保育園　木村園長
ＮＰＯ法人シェアドックスクール　岩原代表理事
川崎市社会福祉協議会　金子氏・鈴木氏
川崎市）まちのひろば創出プロジェクトＢチーム　菅田・渡部・川村

エ 簡単な交流の実施（１０月１７日）

社会福祉法人しいの実でお菓子を作っているため、工房見学を実施し、簡単な交流を実施。当日は、木月のわのメンバーに加えて、木月ほほえみ保育園の年長園児も参加し、相互の理解が深まる機会となりました。

オ 簡単な交流の実施（２月３日）

木月保育園で毎年、実施している木月まつりの中で、しいの実工房で作っているクッキーを販売しました。

カ 振り返り・今後

短期間で日々の業務と並行して実施ししていくため、日程調整等に苦慮することも多かったですが、参加団体それぞれにメリットがあれば、同じ目的のため一致団結した動きができると勉強になりました。

「木月のわ」自体は、今後も活動を続けていくため、引き続き関わりを持って対応していきたいと思います。

（５）どうして公園はいつもきれいなの？ヒト型すごろく（グループＣ）

●プロジェクトメンバー

飯田　珠実　（建設緑政局みどり・多摩川協働推進課）
大高　丈宗　（麻生区役所危機管理担当）
田邉　美樹　（多摩区役所地域振興課）
寺田　早織　（宮前区役所企画課）
村山　達哉　（市民文化局戸籍住民サービス課）

ア キックオフ

(ア)企画実施の場所の検討

1回目の集合研修では、企画実施場所についてグループミーティングを行いました。その中で、チーム内に多摩区役所勤務の職員がいること、登戸付近に在住している方がいたことから、登戸付近の意見が多くあがりました。他にも多摩区のミライノバや、武蔵新城の商店街と協力して何かできないかなどの案も挙がりました。

話し合いを進めていくと、登戸駅周辺で若い人はよく見るが、乗り換え客や通学で訪れている人であり、「地元の若い人」が少ないのではないかという意見が挙がりました。そこで、実際に調べていくと、登戸地区における子供をもつ家庭の割合は、市内他地区と比較して少ないという特徴があると分かりました。「母数が少ない＝つながる機会が少ない」と考え、私たちは、子育て世代どうしがつながるきっかけを創出することを目的とし、登戸地区を実施場所に選びました。

(イ)企画実施の目的

登戸地区の中でも公園を実施場所に選んだ理由は、「新たなつながりを創出するため」そして、「そのつながりを継続させるため」です。
日頃から遊んでいる公園でイベントを開催することで、繋がる機会がなかった人同士がつながることができ、イベント後もつながりを継続することができると考えました。

また、従来の公園利用ではしないような遊び方や、意外な活用方法を提案することで、より公園を活用しやすくなり、今後は市民の「やりたい」を市民の力だけで実現できるような道筋を作ることを目的としました。

そして、人々のつながりだけでなくゴミのポイ捨てや維持管理の担い手不足といった公園の課題を解決するきっかけになることを目指しました。

イ 現地調査とヒアリング

(ア)対象地の選定

9月15日に多摩区役所道路公園センターに、公園の活用について相談したところ、市民主体で行うのであれば管理運営協議会がいる公園が良いこと、火の利用は市が主催であれば行えることを教えていただきました。その後、班で6個の多摩区内の公園を視察し、広さ、企画の実施ができるかどうか等を確認しました。結果、2023年の6月にオープンした登戸3号街区公園で行う方向になりました。理由は、オープニングイベントを行った実績があること、管理運営協議会が設立されていること、管理運営協議会の活動を発信しているSNSを活用していることがあげられました。

(イ)協力団体へのヒアリング

10月28日に、管理運営協議会の活動を一緒にイベントに協力していただきたいと考えている公園のボランティアさんの普段の活動日に参加しました。ごみ拾いだけではなく、砂場の掃除や植え込みの水やりなど、想像していたより多くの作業を行っており、何度やってもごみが減らない状況や、驚くようなごみが捨てられており団体の活動の実態と、抱えている問題を知ることができました。これらを踏まえ、自分たちが行いたいことを団体の抱えている問題を解決できるように方向を修正し、11月28日に団体の会長にイベントの打診を行いました。12月9日には団体から了承を得られましたが、団体の懸念事項は以下の内容がありました。

・実施日まで時間がない
・イベントに参加者が集まるか
・企画の内容が見えない
・チョークや花火はやめてほしい

不安の声がありましたが、広報や備品の貸し出しについては協力していただけることになりました。また、団体の意向により、公園で禁止されていない花火やチョーク遊びなどのコンテンツも除外することになりました。

ウ　実施に向けた準備

(ア)すごろくの作成

　道路公園センターやボランティア団体と調整する中で、企画当初の内容からはだいぶ違ってしまいましたが、コンセプトである「公園でこんなことできるんだ！」を実現できるために、公園で砂鉄が取れるかの実験や現地の樹木を確認するなど団体の活動に参加しながら、楽しいすごろくのマスを作れるように試行錯誤を行いました。

公園で砂鉄の採取を試みる様子

すごろくを作成する様子

(イ)チラシの作成

　イベントで団体の活動を知ってもらうためのプログラム用紙やチラシ等の調整を行いました。チラシの配布について多摩区役所保育所等・地域連携担当や配布先の小学校、駅前の掲示板へのチラシ掲示のために登戸区画整理事務所と連絡を取り、相談、調整を行いました。広報先は以下の通りです。

南武町会・下河原町会の掲示板	８部
登戸駅前掲示板	１部
管理運営協議会Instagram	
登戸小学校	320部
登戸駅周辺の保育園	100部
多摩区役所等	60部

チラシ

当日プログラム用紙

(ウ)参加賞

　市民文化局パラムーブメント推進担当や、建設緑政局緑化フェア推進室などに、当日参加者への景品をご提供いただきました。

エ　イベントの開催（1月20日）

(ア)イベント概要

「どうして公園はいつもきれいなの？ミッションクリアでなぞ解明！ヒト型すごろく」

日時：令和6年1月20日（土）　10時～11時30分

　　※雨天の場合は１月27日（土）に延期

場所：登戸３号街区公園

定員：40名（オリジナル巾着作り定員）

申込：事前申し込み制・先着順（当日の空き状況によって当日参加も可能）

(イ)当日の様子

　公園管理運営協議会による定例の公園清掃（毎週土曜日8時～9時）実施後、公園にすごろくのマス等を設置し、10時からイベントを実施しました。当日は、公園管理運営協議会の方にもご参加いただき、すごろくのマスに書かれたミッションの運営にご協力いただきました。

　受付順に親子２～３組で１つのグループになってもらい、交代でサイコロを転がしながら、グループごとにマスを回ってもらいました。当日初めて会う親子同士でグループを組んでいただきましたが、遊んでいるうちに会話が生まれたり、一緒に公園を走り回ったりする様子を見ることができました。

　当日は寒く、一時的に雨も降る中での開催となりましたが、事前申し込み・当日参加合わせて約80名の方にご参加いただくことができました。

(ウ)すごろくのマスの内容

① 公園を１周する
② すべり台をすべる
③ 倉庫にタッチする
④ 公園のすなばに なにがかくれている？【STOPマス】（砂鉄探し）
⑤ ○○さんにあいさつする
⑥ 公園を１周する
⑦ すなばですなを ふるいにかける
⑧ 葉っぱでオリジナルのきんちゃくをつくろう【STOPマス】
⑨ 落ち葉をひろう
⑩ 土管をくぐる
⑪ すなのはきそうじ
⑫ 公園にどんなごみがすてられているか、○○さんにきいてみよう【STOPマス】
⑬ やまにのぼってジャンプする
⑭ ひらくベンチをさがそう
⑮ ソヨゴの木をさがす
⑯ きょうのかんそうを かいてみよう【GOAL】
⑰ すなばですなを ふるいにかける【STOPマス】
※【STOPマス】は、そのマスを通過する際に必ず止まってミッションを実施。
※「○○さん」の部分には、公園管理運営協議会の方のお名前を記入。

公園にあるものを活かしたアクティビティ（②、⑩など）、公園での遊びかたを提案するもの（④、⑧）公園を管理している方を知ってもらう機会を作るもの（⑤、⑫）、公園管理の仕事やマナーを知ってもらうもの（⑦、⑪など）などのマスを用意しました。

公園に捨てられたゴミについて話を聞く様子

砂の掃き掃除体験の様子

オ 当日の運営に関する振り返り

(ア)参加者、協議会メンバーの感想

イベント参加者には、最後に感想を書いていただきました。子ども達からは、「公園のことをよく知ることができた」「ゴミがいっぱいポイ捨てされていると知った」「いつも公園を綺麗にしてくれてありがとう」といった感想をいただきました。

また、保護者の方々からも、「公園の管理の仕方が分かった」「新しい遊び方や防災倉庫があるということ等、公園を知ることができた」といった感想をいただきました。

アクティビティを通じて、ただ遊ぶだけではなく、ごみが多く捨てられている現状や、自主的に公園の清掃を行ってくれている方々の存在を、親子で楽しみながら知っていただくことができました。

アクティビティ終了後に感想を書いている様子

自由に感想を書いたり、シールで彩ったりしてくれました

また、当日のイベント運営に御協力いただいた公園管理運営協議会の方々からも、「昨年６月にできたばかりの公園。認知度の向上になった。活動に参加してくれる人が増えるとうれしい」「ごみを捨てる人が減り、公園美化になれば」といったコメントをいただきました。

調整の段階では、このイベントに本当に参加者が集まるのか、また公園の抱える課題解決につながるのか、といった点を懸念されていましたが、実際にイベントを行って一定の手ごたえを感じていただくことができました。

(イ)班員による振り返り

難しかった点として、当日のオペレーションの想定が挙げられます。

特に、事前申し込み制という形を取っていたものの、公園という場所の性質上当日の飛び入り参加も可としていたことから、参加者数が読めなかったため事前の想定が立てづらかったと感じました。

また、イベント運営の経験が少なく、人や物の配置、企画の所要時間の見積り、一度に参加者が集中した時の対応等の想定にも苦労を要しました。子どもを対象としたイベントであったことから、すごろくの進行を促したり、各アクティビティにおいて分かりやすくレクチャーを行ったりと、子ども向けの企画では多くの補助が必要であるということも、実際にイベントを行う中で実感しました。

調整の段階では、実施内容やスケジュールについて我々と団体の思惑が必ずしも一致せず、困難もありました。地域の団体等へのアプローチを考える際に、地域では既に日頃から様々な活動をしている方々がいるということを意識した上で進める必要があったと感じました。

カ 企画全体を通しての振り返り

企画全体を通しての最大の反省点として、連携先の選定や協議の開始が遅れたことによる認識共有の不足が挙げられます。開催場所や連携先町内会の選定を含む、具体的な企画内容の決定や町内会への提案が遅くなったことで、開催までの準備日数に余裕がなくなり、認識共有やイベント内容、特に公園の利用方法に関する調整の期間があまりとれませんでした。そのため、最終的に開催の許可はいただけたものの、参加者数の懸念など、町内会側にネガティブなイメージが残った状態で当日を迎えることになってしまいました。日数に余裕のある段階から調整を進めていれば、町内会側の理解をより深めた状態で当日を迎えることができ、さらに、より深い関係性を構築することで踏み込んだ企画内容とできるよう交渉する余地もあったものと考えています。また、調整の中で「コロナ禍で途切れていた餅つき大会を復活させたい」という意向は伺うことができていたものの、準備期間が十分取れない等の事情から実現には至りませんでした。企画立ち上げ当初のコンセプトの一つに「普段公園でできないような意外性のある企画を行うこと」を挙げていたため、この部分まで実現できなかったことは力不足を痛感している点です。

加えて、職員が想定していた「売り」と町内会側の反応に差があったことも大きな反省点です。例えば、チョークアートは当初目玉企画の一つとして提案しましたが、イベント後に（市民に自発的に）同様の利用をされた場合に、清掃等を行うことが難しいという理由から実現しませんでした。職員としては当日のイベントを盛り上げたいという想いでの提案でしたが、イベント後の町内会側の負担まで考えが周っていなかったことを実感しました。言葉では「相手のことを考える」という観点を理解しているつもりでも、実際に行動してみるといかに考えが及んでいないかということを勉強させられました。

一方で、当日は当初の想定をはるかに上回る人数の参加があり、職員、町内会双方が安堵しました。イベント中は参加者から「町内会の活動を初めて知った」という声が多くあがり、町内会の方からも一定の手ごたえを得られたとの感想をいただけました。また、グループを組んだ参加者間でコミュニケーションを多くとりながらイベントを楽しんでいた様子が見受けられ、地域に対しての貢献の観点においては一定の結果を残すことができたと捉えています。

今回のプロジェクトを通じて、市民と「共に」イベントを創り上げる難しさを味わうと同時に、一からイベントを企画、実行したという達成感を得ることができました。班員の中には通常業務において市民との関わりが薄い職員もいますが、今後経験する職務の中で必ずプラスになるような経験ができたものと確信しています。プロジェクトの進行に際し、町内会、事務局のみなさまからの大きな支援をいただき、最後まで走りきることができました。御協力いただきました全ての皆さまに末筆ながら感謝申し上げます。

５　さいごに

この研修は、職員がまちに飛び出し、地域の方々と連携しながら「まちのひろば」をお試しで実践するなかで、コーディネートスキルや市民志向、チャレンジの意識を磨いてほしいと思い開催してきました。

プロジェクトを進める中ではいろいろな苦労もあり、当初思い描いていた企画とは違う内容になっていったグループもあります。ただ、当初思い描いていたものと違うものになるのは悪いことではなく、関係部署や地域の方と対話する中で、試行錯誤しながらより精査されていったのだと思います。苦労した面もあったと思いますが、チームで協力して企画をやりとげ、当日、地域の方の喜んでくれたりする様子を見て、大きなものが得られたのではないかと思います。

最終回の集合研修でも、アンケートの結果からも、それぞれの参加職員の気づきや成長が感じられ、我々事務局としても、非常に嬉しく思いました。一方で、プロジェクトの負担感などの声もあり、運営上の工夫などで、今後改善していきたいと考えています。

最後に、それぞれの企画を実践する中で、様々にアドバイスや調整をいただいたり、地域の方とつないでいただいた関係部署の皆様、誠にありがとうございました。参加職員を送り出していただいた職場の皆様も、ありがとうございました。

また、何よりも、職員の思いを受け止めて、ヒアリング等にお時間を割いていただき、一緒に企画の実践にご協力いただいた地域の皆様方に、深く感謝申し上げます。

今後、様々な職場で仕事をしていく中で、この研修が参加職員にとって、役立つもの、地域の人たちと一緒にまちをつくっていくという思いにつながるものになったらと願っています。